

アジアの新しい秩序とは

——鍵にぎる中国・朝鮮半島

中嶋嶺雄

ヨーロッパを震源地として起こった冷戦の終焉と社会主義の変貌は、アジアにどのような影響をもたらすのか。天安門事件から一年を経て、表面的にはいささかの動揺も見せようとしぬ中国。一進一退を繰り返す朝鮮半島南北の歩み寄り。「ドイモイ」という改革が進められつつあるベトナム。一方で、アジアにおける冷戦の終焉を待ってはられないとばかりに東欧、ソ連、中国との積極外交を急ぐNIES諸国。——混沌から多様性へと向かいつつあるアジアの、二十一世紀へ向けた国際関係を展望する。

アジアにおける

新しい国際関係の誕生

冷戦が終焉した時代のアジアの国際関係を考えると、次の三点が大きくクローズアップされると思います。

一つは、かつて見られなかった国際関係がアジアに登場したことです。

今までの冷戦の論理で説明できる国際関係は、おおむね次のようなものでした。

まずヨーロッパで発生した冷戦が飛び火して、アジアは朝鮮戦争とベトナム戦争という二つの大きな戦争(熱戦)を経験しました。アジアには本来、多様な国が存在していたにもかかわらず、第二次大戦後は東

西両陣営に分かれて、アメリカとソ連の指導下における国際関係が中心を成してきたわけです。これに加えて一九六〇年代からは、東側が二つに割れるという事態が起きました。つまり中国という存在が非常に強く自己主張はじめることによって、中

ソ対立が表面化し、ある意味で中ソ冷戦的な状況が約三十年間続いたのです。その結果、米中ソという三極構造がアジアに出現しました。ソ連を共通の敵とするアメリカと中国が手を結ぶといった外交術に象徴される「冷戦の論理」で国際関係を説明できたのは、この時期までです。

ところが、八〇年代後半から、特に経済的な理由で米ソの冷戦が持ちこたえられな

くなりました。アメリカもソ連もアジアのスーパースターたりえなくなつたわけです。新しい国際関係はここから始まりますが、それは皮肉にも、韓国に中国のハイジャック機が降り立った事件が契機になったのです。韓国と中国はたいへん近い存在であつたにもかかわらず、従来は交流がなかったのですが、ハイジャック事件をきっかけに、中韓関係という新しい国際関係が登場しました。中韓関係は、盧泰愚政権の北方外交の目玉商品の一つとしてたいへん重要な国際関係になりつつあります。

同時に韓国は、最近のゴルバチョフ・盧泰愚会談のように、積極的に共産圏外交を展開しています。ソ韓関係などは従来のアジアの国際関係にはなかったものです。

一方、NIESで現在もつとも成績がよい台湾も、積極的な外交政策を展開しています。人口わずか二千万人で、大陸の六〇分の一という小さな存在、しかも国際社会で孤立化させられているにもかかわらず、台湾の貿易総額は日本の四分の一以上にまで伸びており、外貨準備高は最近、瞬間的にはありますが、日本を抜いて世界第一位になりました。最近では東欧にも投資し、



中嶋嶺雄 なかじま みねお
一九三六年長野県生まれ。東京大学大学院修了。東京外国語大学教授、国際関係論、現代中国学、アジア地域研究。主著に『北京列強』『逆説のアジア』『中国の悲劇』『中国革命とは何であったのか』など。

ソ連との貿易も増加しています。そしてもちろん中国とも、天安門事件にもかかわらず、今年には百万人もの同胞が大陸を訪れるでしょうし、延べにするともう二、三百万人が一度は渡航していることになります。さらには北朝鮮との経済関係も芽生えようとしています。このようなことは、冷戦時代にはまったく考えられなかったことです。こうして見てくると、冷戦構造の大きな枠組みが崩れていくのにもなって、アジア諸国が主体的で多様な動きを展開していることがわかります。アジアのダイナミズムは、このような各地域の相互依存関係の網の目がますます拡大してきたことによって生じているのです。

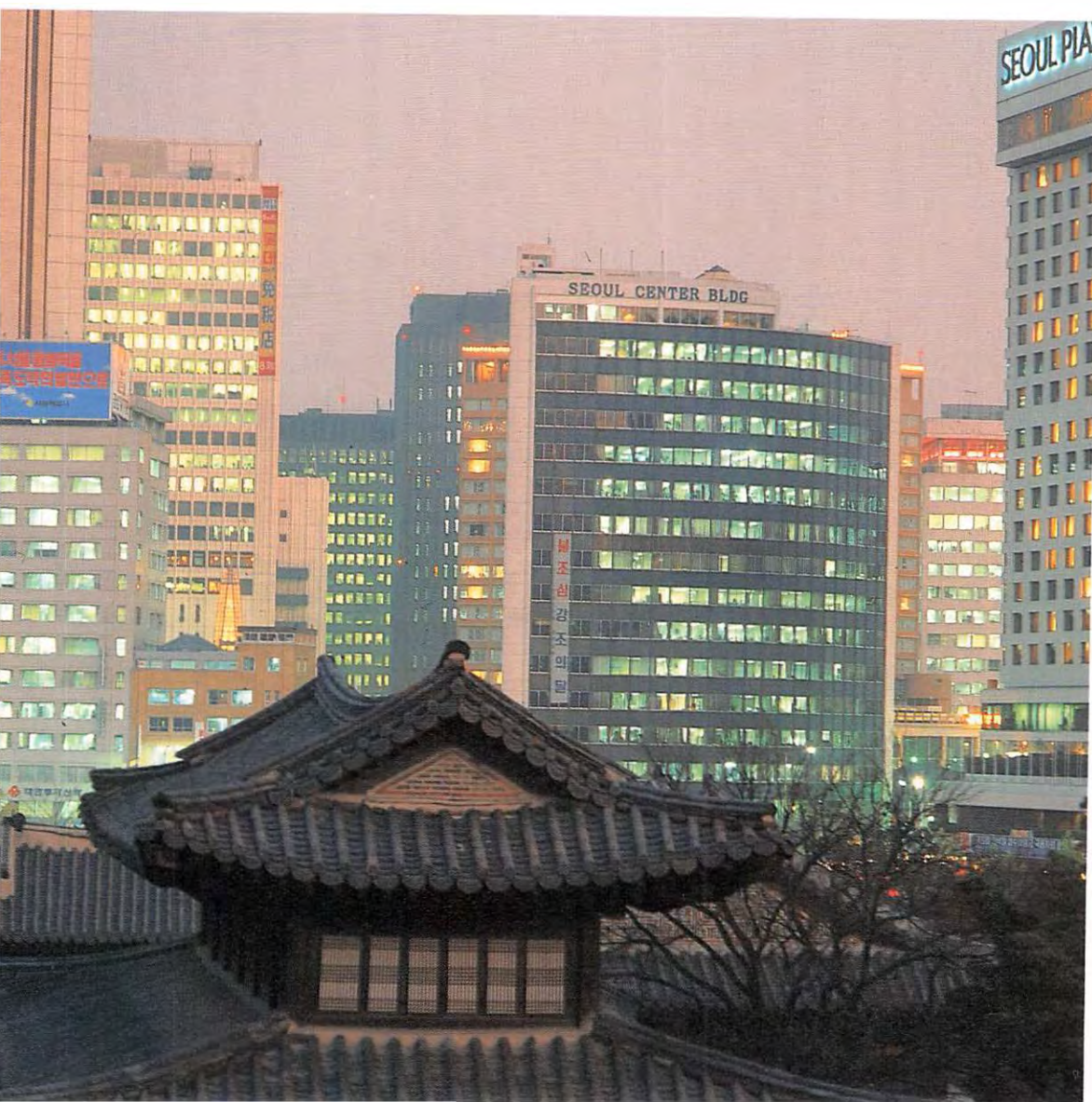
国家を超えた「民際外交」の活況

アジアの国際関係を考える二番目の視点として、国家の枠を超えた民間外交の活況化があると思います。これはむしろ、アジア的な特徴というよりも、二十世紀から二十一世紀にかけての全世界的な特徴かもしれません。

このことは、国連に加入できず、IMF・ガットといった国際経済機構からもはじきだされている台湾が、あれだけの経済成長を成し遂げているという事態に端的にあらわれています。その理由は、民間の外交チャネルをうまく利用して相互依存関係をつくっていったからです。国交のない国にどんどん貿易事務所をつくって経済交流を進

め、国家のほうがむしろそれにつき動かされている。台湾は、ある意味で日本以上に商人国家に徹したといつてよいでしょう。建て前やイデオロギーにこだわらない「弾性外交」の成功例です。

国家の集合体である国連も、世界の紛争を処理しえず経済を調整する機能をはや失いつつあります。国連の機能が低下したために、G5やサミットなど、議題ごとに新たに名前をつけた会議が必要になってき



韓国ソウルの夜景



ました。

社会主義の瓦解を見るまでもなく、世界的に民間の活力が非常に重要になってきました。公的な大機構があまり機能しなくなったかわりに、アンオフィシャルでノンガバメントな「民際外交」が国家の行き先を導いているのです。

アジアに「共通の家」は生まれるか

アジアの国際関係についての第三番目の視点は、これからの課題ともなるわけです。

が、こんなにも多様になったアジアが果たして共通の基盤を築けるのか、という問題です。

ゴルバチョフが冷戦の終焉とともに言い始めたことは、ソ連は「ヨーロッパ共通の家」の一員である、ということでした。ところが、アジアにはそのような意味での「共通の家」があるかどうか。

ヨーロッパには「共通の家」の土台がありました。戦後、東欧はソ連式の革命をやって屋根だけ色を変えてみましたが、結局うまくいかないことがわかったので、社会主義の屋根をはずしてしまっただけ。しかし土台がしっかりしているわけですから、今度は西側の屋根をもつてくれば、一つの「共通の家」の中におさまるのです。このような「ヨーロッパ共通の家」の土台は、歴史的にいうと、十七世紀の中葉以降、近代市民国家の形成とともにできあがりました。

アジアには残念ながら、アジア全体を規定するような国際システムはありませんでした。アジアには、ヨーロッパ的で水平の国際関係ではなく、中国王朝が周辺国家を支配したような、垂直的なヒエラルヒーとしての国際関係しかなかったわけです。その中国は革命をやりましたが、結局うまくいかに苦悩しています。

ヨーロッパの場合、共産主義をやめればまた以前に戻るかもしれない。ところが、アジアで共産主義をやめたら何が残るか、例えば中国はどうなるのかという問題がある。

ります。

例えば、最近四十二年ぶりに祖国に戻ってスメタナの『わが祖国』を指揮したクベリツクにチェコスロバキアの国民は喝采をおくりましたが、この曲はパリでも、ワルシャワでも、モスクワでも、どこで演奏してもみんなが共鳴します。ところが、アジアにはそのような文化の共通基盤もなさそうに見える。基盤の違いは冷戦の時代は押さえつけられていたものであまり表には出ませんでした。これからアジア各国で交流がさかんになると、より一層目立ってくるのではないかと思います。

ヨーロッパのような共通の土台をどのようににつくっていくかが、アジアの今後に残された大きな課題でしょう。

共通の基盤としての「儒教」

とはいえ、なにもヨーロッパに真似た共通の基盤をつくれ、という話ではありません。アジアには西欧近代市民社会とは違った価値意識があるのではないか、という考え方もあります。

東洋の儒学のなかに、ヨーロッパ的なプロテスタンティズムに見られる禁欲主義とは違う、非常にリベラルで勤勉な思想があり、それがアジアの近代化に役立ったのではないか、という議論があります。これは欧米人の間で盛んにもちあがっています。確かに、アジアが遅れヨーロッパが進んでいるという単純な見方はできません。



例えば、日本の製品が非常に品質が良くよく売れる背景には、ある種の集団主義的な義務感につき動かされて一生懸命働く儒教的な精神があるのではないか、という議論も最近行われています。

そのような儒教的な精神という共通の基盤をアジアにさぐることは不可能ではないはずです。エコノミストの間では、儒教などとは意味を持たない、それよりも資源がどのように配分されて、どのように物が加工されているのか、といった純経済学的な要因のほうが重要だという意見もあります

が、それでは、資本があつてそれなりの資源さえあればその国が経済発展するのかといえ、そうはいかない。やはり経済発展を支える因子としての文化的土壌が重要だと思われれます。

例えばコミュニケーションの手段としての漢字文化圏に着目することもできます。漢字を書いたり覚えたりすること自体は非常に知的な訓練になりますし、表意文字としての漢字は、意思伝達の手段として非常にすぐれた特性をもっています。

そのような儒教文化圏、あるいは漢字文化圏を基盤として、アジアの将来をまとめいく可能性もある、ということはいえると思います。

もちろん、ヨーロッパに比べると人権問題に関する意識が低く、本当の意味の個人主義や市民社会が確立していない、というアジアの問題がいまだに存在していることも忘れてはなりません。アジアにはこのような二面性があつて、そこには常にプラスの評価とマイナスの評価が存在しています。そこをどのように一元化していくかも重要な課題の一つでしょう。

アジア新世紀の鍵を握る 「多様性の国」中国

アジア新世紀の鍵を握るのは、二十一世紀までにその人口が十数億に達すると見られている中国でしょう。もしも、中国が非常に巨大な人口を抱えつつ、このまま一人

当たりのGDPが数百ドルに満たない状態が続けば、大変危機的な状況が訪れます。

ただ中国の場合は、台湾があり、香港があり、華人社会があるように、中国人自身は非常に優秀な民族ですし、政治社会のシステムが変われば見違えるように発展する可能性はあるでしょう。

では、天安門事件がなぜあいかたちで起こったかというと、一つには革命第一世代の圧倒的な権威がまだ残っていたためです。東欧の場合はおおむね、革命第二世代です。ソ連はゴルバチョフにしてもエリツィンにしても革命第三世代です。そうすると、もうレーニンはいらない、となるわけですから、ところが中国の場合は、きわめて単純化していつてしまえば、とにかく自分たちが革命を実践したんだ、それを今になつて若い奴らの言うことを聞けるか、という上層部の気持ちがあそこまでの強硬弾圧となつてあらわれたのでしょうか。

しかし、革命第一世代はせいぜいあと数年間で退場しますから、その後には大きく変わる可能性があると思います。ひょっとすると香港の返還よりも早く中国は変わるかもしれません。

去年の民主化運動がもう少し大規模に起こつたら、東欧に先駆けて中国共産党は解体していたかもしれません。というのは、それくらい中国共産党の権威は地に堕ちているのです。一般の庶民や学生の誰に聞いても共産党のおかげです、などと言う人は



もういません。そのような状況の中で、中国共産党は批判を力で押さえつけているのです。しかし、この弾圧が続くのも革命第一世代まででしょう。どうしたって、今の体制を転換してゆかざるをえないのです。

転換後の方向としては、多様な中国、という視点が大切だと思います。香港と一緒に広東語の経済圏をつくっていく広東省のような中国、あるいは台湾と経済交流をする福建省のような中国、または韓国とつながる東北三省のような中国——経済圏ごとにまとまった多様な中国がお互いに発展を競いあうのが理想です。今こそ、二十一世紀に向けて中国をどのように作り変えていくか、を真剣に議論しなければいけません。共産党一党体制ですべてを管理するという現在の政治システムは明らかに限界にきています。

北朝鮮はどこへ行くか

一方、朝鮮半島の問題解決は二十一世紀までかかると考えています。

今年の四月から五月にかけて、私は日本国際政治学会の訪朝団長としてピョンヤンを訪れましたが、金日成主席が健在でいる限り北朝鮮の現体制はそう簡単に崩れないのではないかと、という実感を強くしました。世界の趨勢とは逆に、北朝鮮は不気味な安定を保っています。チュチュエ（*注）という主体思想を掲げた独自の閉鎖国家の中で、二千万人の国民が疑うことを知らずに

一種の新興宗教国家に凝り固まっている状態、という印象です。金日成王朝の閉鎖的な国家が自己完結しているわけです。

しかし、われわれはこのような北朝鮮を冷笑すべきではない。日本も戦時中そうだったのですから。北朝鮮の場合も、マルクス・レーニン主義で解釈してはダメで、中国ともソ連とも違う、チュチュエ思想に基づいた一種宗教的な独裁国家ととらえるべきでしょう。

それから、北朝鮮こそ儒教国家そのものです。韓国以上に儒教的なヒエラルヒーや親子関係が根づいています。金日成主席を頂点とする儒教的権威主義体制が堅固にできあがっていて、外の世界がどう変わろうと、決して自分たちは動かない。

それでは、これがいつまで続くのか、という問題です。経済的には、私の見る限り、飢えてパニックが起こるほどではありません。物は少ないし、不足経済ですけど、何とかやっているという印象です。巨大なモニUMENTを次々と建てたり、ソウルオリンピックに対抗して世界一大きなスタジアムを作ったりして、シンボリックなデモンストレーション効果を国民に与えている。北朝鮮にはまだ神話が残っているのです。共産主義国家として最後に残るのは北朝鮮かもしれません。

しかし、北朝鮮も徐々に改革・開放をやらざるをえない立場に追い込まれていることも確かです。ただ、改革の機運が高まっ

でも、ルーマニアのような劇的状況は発生しないかもしれません。政府当局はルーマニアのようにはなるまい、と一生懸命研究していますから。それに、不穏な分子がいるとすぐ排除するシステムが強いこともあります。

北朝鮮が変わるとしたら、意外に思われるかもしれませんが、政治システムにおける台湾化の可能性があります。

今でこそ台湾は大変よくなったとはいえ、二十年以上前の蒋介石時代はたいへんな独裁国家でした。権力を継承した息子の蔣経国總統も権威主義体制を敷きましたが、晩年には自ら民主化をやりはじめ、それを現在の李登輝總統というすぐれてリベラルな政治家が継承しているわけです。

台湾の場合、独裁体制から権威主義体制の間は親子でつないでいったわけです。北朝鮮もそのような形で改革への道を歩む可能性がないとはいえません。台湾もある意味で北朝鮮と同じ儒教国家で、人口も同じくらいですし、状況としては非常によく似ていますから、北朝鮮の台湾化が起こらないとは断定できないでしょう。

南との関係でいえば、韓国は経済に少し陰りが出てきて、政治的にも不安定という問題を抱えていますから、南北対話の動きがいろいろとあるようですが、本当に話し合いの基盤ができるまではまだ十年くらいはかかるのではないのでしょうか。

ただ、一点留保しておかなければならな

いのは、朝鮮民族はまとまるときにはきわめて早い、ということです。もし統一が達成されたとすれば、急速にアジアの中で大きな存在になっていくでしょう。東西ドイツの統一は誰も予想しなかったわけですから、そのような可能性はあながち否定できません。

新しいアジアの中の日本

日本の課題は、アジアに生まれつつある新しい国際関係にどう対応し、先行者としてのリーダーシップを果たしていくか、ということにつきると思います。

ところが、現在の日本の外交姿勢は依然として硬直化していて、世界の変化、アジアの変化にうまく対応できていないという気がします。

その原因の一つは、戦後の対米追従型外交の惰性が残っていることがあげられます。アメリカが中国のほうを向けば日本も中国を向く、という傾向があります。

それからもう一つは、ソ連に対する極端な嫌悪感です。最近でこそ比較的柔軟な姿勢をとるようになりましたが、ほんの少し前まではソ連というと親の仇のごとく嫌っていました。ソ連は悪の帝国で、今にも北海道を占領しに来る、という認識がありました。そのような偏見がある限り、国際社会の変化に対して弾力的に対応することはできないわけです。

日本はこれまで経済が非常にうまくいっ

て、他の国に比べると実に均質的な社会を実現しました。全体が豊かになり、階級闘争の図式では描かれないような社会をつくりあげたのです。そういう意味では日本は、資本主義をうまく修正しながら、社会主義的な要素をも取り入れつつ、たいへんうまく進んでいます。

確かにこれまではそれでよかったのです。ところが、ここまで経済が成長すると、やはり日本だけがうまくいっていいというわけにはいかなくなっていきます。均質的な社会に外国人が入りにくいという問題をどうするか。日本は国際化を唱えながらも、そのような問題とまだ真剣に格闘していません。外国人労働力の問題をはじめとして、米の自由化、入管法——すべて日本の国際化にとって重要な問題なのに、その場限りで先送りしています。いよいよそれを本格的に議論すべき時です。消費税よりもっと重要な問題はたくさんあるので、今こそ政治家も、その見識が問われると思います。

経済大国に酔いしれて日本がおごっていたら、アジアの中でたちまち孤立してしまうでしょう。かといって、日本の悪いところだけをあげつらう立場では通用しません。アジアから見れば日本はやはり光輝いているのです。少しでも追いつきたいというアジア諸国の思いを真剣に受けとめて、新しい国際関係の渦の中に日本は積極的に入っていくべきだと思います。

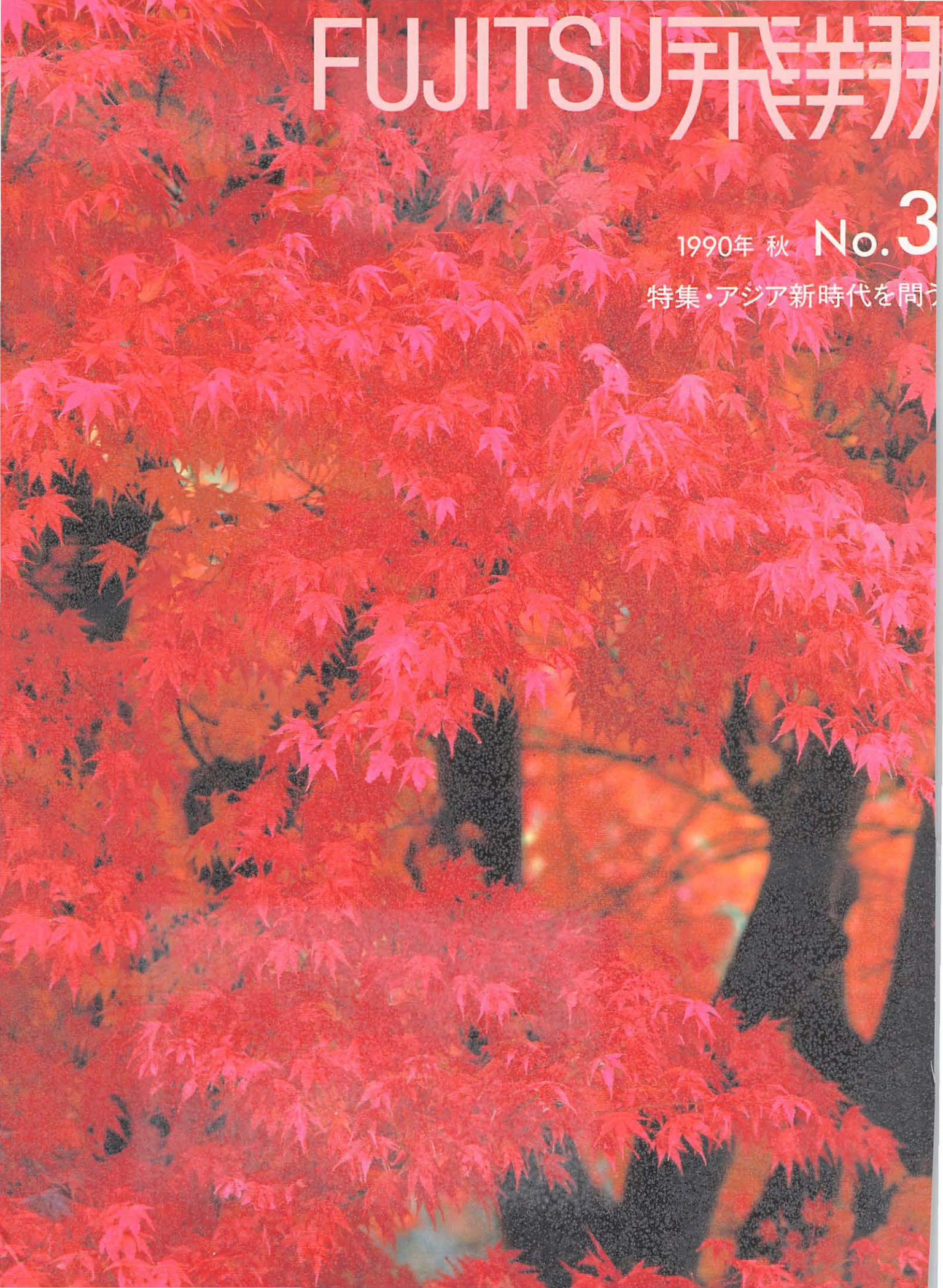
*チュチェ思想(主体思想)

金日成主席が提唱する朝鮮民主主義人民共和国の指導原理。六〇年代後半、中ソどちらにもくみしない、思想・政治・経済・国防における自立をうたて形式化された。八〇年代に入ってから、人民大衆の主体性を実現するための革命的 세계観である、という側面が強調され、世界に対するメッセーを強めている。

FUJITSU 飛翔

1990年 秋 No.3

特集・アジア新時代を問う





目次 CONTENTS

日本の四季から 高原のコスモス ◆写真 森田敏隆

2

特集 アジア新時代を問う

アジア経済圏のダイナミズムと日本企業 ◆渡辺利夫
躍進するアジア財閥企業

5

国際分業体制の確立へ向けて ◆井上隆一郎

10

アジアの新しい秩序とは 鍵にぎる中国・朝鮮半島 ◆中嶋嶺雄
アジア的思想の根底にあるもの

16

可能性としての「郷土主義」 ◆松本健一

22

一〇〇〇フィートの視界 ◆豊高隆三

26

日本人のオリジナリティ探訪

上杉鷹山 その経営改革と人事管理 ◆童門冬二

28

天馬空を行くがごとく生きた男 池田敏雄

32

柳田敏雄教授 筋肉はなぜ動く

38

データを読む② 内外価格差の実態 ◆長銀総合研究所

42

